



↑ 1 宇都宮城址

## わかるかな？

五街道のうち宇都宮を通っていた街道はどれでしょう。

- ① 日光道中
- ② 奥州道中
- ③ 中山道
- ④ 東海道
- ⑤ 甲州道中

# 3 城下町 宇都宮



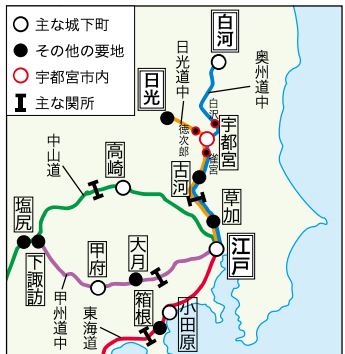
↑ 徳川秀忠像 (松平西福寺蔵)  
関ヶ原の戦いの直前に宇都宮城に在陣していた。

## 江戸時代の宇都宮

関ヶ原の戦い後、徳川家康が江戸に幕府を開くと、宇都宮は譜代大名が統治するようになります。本多正純が城主となると、宇都宮城と城下の整備を行い、宇都宮を近世的な城下町へと造り替えます。この時の整備による町の区割りが、現在の宇都宮のまちなみの形になっています。

宇都宮は、江戸を起点とした五街道のうち、「奥州道中」と「日光道中」の二つの道の分岐する場所であり、徳川将軍や参勤交代の大名の宿泊所として、多くの人や物が行き交い、ますます発展していきました。

ここでは、江戸時代の宇都宮について見ていきましょう。



↑ 日光道中と奥州道中

- ☺ 宇都宮城址公園には、宇都宮城の一部が復元されているよ。
- ☺ 宇都宮城は、何度も将軍が泊まったんだって。どうしてかな？
- ☺ 江戸時代に整備されて、今も残っている道はあるのかな？

動画を  
見てみよう！



### 学習問題

江戸時代の宇都宮は、どんなまちであったのだろうか。



世紀	BC/A.D.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	徳川	江戸	明治	昭和	平成	令和	南北朝	安土桃山						

## 幕府の重要拠点 宇都宮城

江戸幕府は、宇都宮が東北地方の上杉氏や伊達氏等の外様大名を抑える上で、また二つの街道が行き交う軍事・交通上の重要な地点であることから、宇都宮城に譜代大名を配置し、宇都宮藩がこの地域を治めることになります。ここでは、その拠点となった宇都宮城について見ていきましょう。

### 1 譜代大名による宇都宮藩の統治

宇都宮藩の藩主は、譜代大名である奥平氏、本多氏、松平氏、阿部氏、戸田氏が務めます。中でも奥平家昌は徳川家康の外孫に当たる人物であり、その後の本多正純は家康の重臣、戸田忠真・忠温は老中職に就くなど、有力な大名が宇都宮を治めていました。

### 2 将軍が日光社参の際に泊まる城 宇都宮城

城主は、お城の中心である本丸に居住するのが一般的ですが、宇都宮城は、将軍家が日光社参をする際の宿泊場所の一つで、本丸内に設けられた御成御殿に将軍家が宿泊しました。このため、宇都宮城主は二の丸に御殿を設け、居住していました。8代将軍吉宗の社参以降は、本丸の御成御殿は使われなくなり、将軍が日光に社参するたびに二の丸御殿に新たな御座所が増設されました。将軍の滞在中には、将軍と宇都宮城主の主従関係を再確認するための様々な儀式が行われました。

## 城下のにぎわい

宇都宮は、徳川将軍の日光社参や、東北の大名の参勤交代をする際に宿泊する場所であったことから、交通上重要な地点でした。ここでは、現在の宇都宮につながる、城下の町並みや当時のまちなみにぎわいの様子について見ていきましょう。

### 1 本多正純による城下町の整備

本多正純は、宇都宮城の東側を通っていた奥州への道を、城の西側に付け替え、現在の伝馬町で日光道中と奥州道中に分岐させました。この道の付け替えにあわせて寺や町屋等の移動がありました。寺は城を取り囲むようにその多くが街道沿いに配され、工人や商人たちの町は主に城の北側に、西側には武家屋敷が配されました。江戸時代に建築されたお寺や、当時使われていた町名などが今も残り、宇都宮城下の名残を見つけることができます。(→p.39)



↑ 4 奥平家昌像 (中津城提供)



↑ 5 宇都宮城イラスト

### ことば

#### ◆ 譜代大名

関ヶ原の戦いの以前から徳川氏に従ってきた1万石以上の領地を与えられた大名。

#### ◆ 外様大名

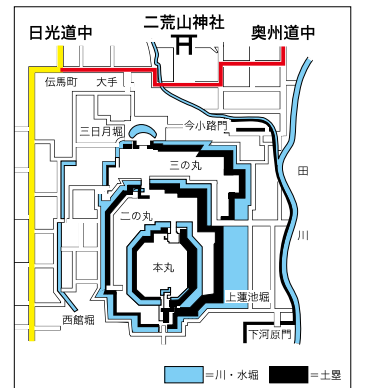
関ヶ原の戦いの後にあたらしく徳川氏に従った大名。

#### ◆ 日光社参

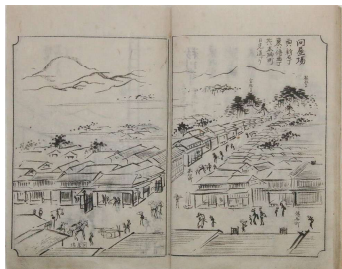
将軍家が徳川家康の墓がある日光東照宮へお参りに行くこと。

#### ◆ 御座所

将軍が宿泊するところ。



↑ 6 本多正純整備後の宇都宮城下



↑ 1 宇陽略記(日光道中と奥州道中の追分の地)(個人蔵)

ことば

- ◆ **本陣**  
大名や幕府役人の宿泊所
- ◆ **脇本陣**  
本陣の予備として使われていた宿泊所
- ◆ **旅籠**  
旅人を宿泊させることを生業とした家
- ◆ **荒物**  
家庭で使う生活雑貨等
- ◆ **紺屋**  
染め物屋



↑ 2 二荒山祭礼絵巻(個人蔵)



↑ 3 復活した火焔太鼓山車と桃太郎山車

2 大名や幕府の役人も利用した宿場

日光道中・奥州道中沿いには宿場が設けられていました。現在の宇都宮市内には、宇都宮宿のほかには雀宮宿、徳次郎宿、白沢宿がありました(→p.37)。

宿場には本陣、脇本陣のほか旅籠などが置かれ、公用の人の宿泊や物の輸送を担っていました。これらを円滑に行うために各宿には人足と馬の常備が義務付けられていました。

これらの宿場は仙台伊達家や津松平家などの大名が参勤交代をする際に利用していました。



宇都宮市内には、宇都宮宿の前の宿場として雀宮宿、日光道中の次の宿場である徳次郎宿、奥州道中の次の宿場である白沢宿がありました。現在も宿場の面影が残っているところがあります。

3 にぎわう宿場、栄える商家

二つの街道が行き交っていた宇都宮は、城下町であるとともに宿場町としても大変にぎわっていました。街道の分岐点付近(現在の伝馬町付近)には、大名の参勤交代などの際に宿泊する本陣や旅籠が設けられ、たくさんの方が行き交いました(→p.39)。

また、穀物・酒・醤油・塩・呉服・古着・荒物などの日用品を扱う商人や、大工・紺屋・鍛冶屋などの職人が住んでいました(→p.40)。この中には、江戸時代後期に豪商となって江戸に出店していくものも現れました。

4 町人たちが盛り上げた二荒山神社のまつり

今も続く、二荒山神社の菊水祭は、1672(寛文12)年から始まったとされています。39の各町から、山車、屋台など多彩な出し物が登場する盛大な祭りで、江戸の山王祭や神田祭とともに、そのにぎわいぶりは全国的に知られていました。

今も、当時使用されていた、山車や屋台が市内に残っており、城址公園のまちあるき情報館でも、その姿を見ることができます。



江戸時代の菊水祭は、とてもにぎわっており、江戸の山王祭や神田祭とともに、祭りの番付でもベスト10に名を連ねていたんだ(「諸国御祭礼番付」より)。



新石町の火焔太鼓山車や、南新町の桃太郎山車など、復元された山車が、菊水祭に合わせて市内をめぐってたよ。



◀ 火焔太鼓山車



◀ 桃太郎山車

▶ 戊辰戦争の戦火に見舞われた宇都宮城下

幕末、ペリー来航により日本中が混乱し、尊王攘夷運動が活発化する中、幕府の力が弱まり、1867(慶応3)年に徳川慶喜が朝廷に政権を返上し、江戸幕府が終わりをつげます。

1868年の戊辰戦争で、旧幕府軍は、日光を目指し北上を続け、宇都宮藩も戦いに巻き込まれることになりました。

この戦いによって、宇都宮城や二荒山神社をはじめ、城下の大半が焼失してしまいました。

1 宇都宮の戊辰戦争 旧幕府軍による宇都宮城占領

1868年4月19日、新撰組の土方歳三などに率いられた旧幕府軍は、堀や土塁が少なく防備の薄い宇都宮城の南東部から攻めこみました。新政府側についた宇都宮藩は旧幕府軍に押され、二の丸館に火を放ち退却します。その火は、南東からの強い風を受け燃え広がり、城下のほとんどが焼失しました。

この戦いの指揮を執っていた戸田忠友は、わずかな人数で城を脱出し、宇都宮藩と姻戚関係にあった館林藩へ退却しました。

2 宇都宮の戊辰戦争 新政府軍による宇都宮城奪還

1868年4月23日に、宇都宮城を占拠した旧幕府軍に対し、薩摩・大垣藩を主力とする新政府軍が城の西側にあたる六道辻を突破して、宇都宮城に迫り、松が峰門付近で戦いとなります。

夕刻には、新政府軍の総攻撃により、旧幕府軍は一斉に退却し、日光に向かったため、宇都宮の攻防は幕を閉じました。

3 最後の藩主——戸田忠友

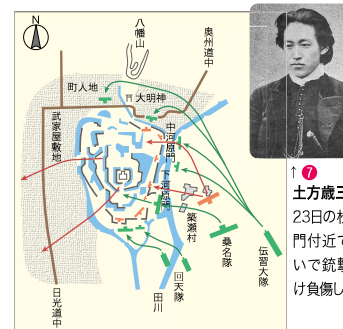
最後の藩主である戸田忠友は、明治維新後に宇都宮藩知事となり、宇都宮の復興に取り組みました。その後、1871(明治4)年の廃藩置県により、その任が解かれました。



↑ 4 戊辰戦争宇都宮城攻略の図(光明寺蔵)

ことば

- ◆ **尊王攘夷**  
尊王は天皇を尊ぶこと、攘夷は外国を追い払うこと。



↑ 5 宇都宮城攻防戦 4月19日

旧幕府軍が宇都宮城を攻め込む。



↑ 6 宇都宮城攻防戦 4月23日

新政府軍が宇都宮城を奪還するために攻め込む。

↑ 7 最後の藩主 戸田忠友(栃木県立文書館蔵)



↑ 7 土方歳三写真 23日の松が峰門付近での戦いで銃撃を受け負傷しました。

まとめる ひろげる



宇都宮は、江戸時代に、本多正純による道の付け替えや城下整備により、近世的な城下町につくりかえられました。これまでの二荒山神社の門前町としての役割に加え、奥州道中と日光道中の分岐点の宿場町、そして商人や職人が暮らす商業のまちとして発展してきました。

歴代宇都宮城主（江戸時代以降）

江戸時代の宇都宮城主

江戸時代になると、宇都宮城の城主は幕府が譜代大名の中から任命しました。

代	当主名	石高	就任	退任	主なできごと
1	奥平家昌(おくだいら いえまさ)	10万石	1601	1614	
2	奥平忠昌(おくだいら ただまさ)	10万石	1614	1619	徳川秀忠が初の日光社参
3	本多正純(ほんだ まさずみ)	15.5万石	1619	1622	宇都宮の町割りの整備
4	奥平忠昌(おくだいら ただまさ)	11万石	1622	1668	
5	奥平昌能(おくだいら まさよし)	11万石	1668	1668	興禅寺で刃傷事件が起きる
6	松平忠弘(まつだいら ただひろ)	15万石	1668	1681	江戸の浄瑠璃坂で仇討事件が起きる
7	本多忠泰(ほんだ ただひら)	11万石	1681	1685	
8	奥平昌章(おくだいら まさあき)	10万石	1685	1695	
9	奥平昌成(おくだいら まさしげ)	9万石	1695	1697	
10	阿部正邦(あべ まさくに)	10万石	1697	1710	
11	戸田忠真(とだ ただざね)	7.78万石	1710	1729	老中に就任。徳川吉宗が日光社参
12	戸田忠余(とだ ただみ)	7.78万石	1729	1746	
13	戸田忠盈(とだ ただみつ)	7.78万石	1746	1749	
14	松平忠祇(まつだいら ただまさ)	6.59万石	1749	1762	
15	松平忠恕(まつだいら ただひろ)	7.78万石	1762	1774	粉搦騒動が起る
16	戸田忠寛(とだ ただとお)	7.78万石	1774	1798	
17	戸田忠翰(とだ ただなか)	7.78万石	1798	1811	
18	戸田忠延(とだ ただのぶ)	7.78万石	1811	1823	
19	戸田忠温(とだ ただはる)	7.78万石	1823	1851	老中に就任
20	戸田忠明(とだ ただあき)	7.78万石	1851	1856	菊池教中が新田開発を行う
21	戸田忠恕(とだ ただゆき)	7.78万石	1856	1865	山陵修補事業に取り組む
22	戸田忠友(とだ ただとも)	6.78万石	1865	1871	明治新政府のもと藩知事となる

赤穂浪士が参考にしたとされる浄瑠璃坂の仇討ち

1668(寛文8)年2月18日に奥平忠昌が亡くなり、3月2日に興禅寺(宇都宮市今泉3丁目)で法要が行われました。その際、奥平氏の家臣である奥平昌人と奥平内蔵允が口論となり、双方が刀を抜き切り合いとなりました。内蔵允は傷を負い、帰宅後憤りのあまり自決してしまいます。

この事件に対し、幕府は争いの原因が内蔵允にある

とし、その息子源八を改易とし、一方の単人はおとがめなしとしました。この決定を不服とした源八と彼に同情した四十数名が脱藩し、仇討ちを行おうと単人を追跡し、4年後に江戸の浄瑠璃坂で討ち果たしました。

この事件の30年後に「忠臣蔵」で名高い赤穂浪士の吉良邸討ち入りがあります。赤穂浪士たちは、仇討ちを行うに際し、浄瑠璃坂の仇討ちを参考にしたのではといわれています。

交通の要衝の地 宇都宮

1 将軍家の日光社参

将軍家の日光社参は19回を数え、多くが家康の命日にあたる4月17日に行われる大祭に合わせて行われました。

江戸城を出発した社参の一行は、岩槻城、古河城、宇都宮城にそれぞれ宿泊し、4日目に日光に到着しました。帰路は、17世紀までは壬生経由で帰りましたが、吉宗以降は帰りも日光道中を通りました。

その規模は、8代将軍吉宗の場合で見ると、行列の人数が約13万人、人足が約22万人の大行列で、幕府の権威を示す大規模なものでした。



↑ 1 日光社参の経路

2 宇都宮宿周辺の宿

宇都宮市内には、宇都宮宿以外に、雀宮宿、白沢宿、徳次郎宿がありました。

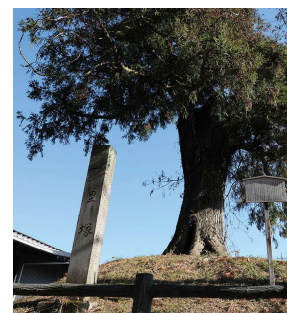
雀宮宿は、宇都宮宿の一つ前の江戸よりの宿です。白沢宿と徳次郎宿は宇都宮宿の次で、奥州道中沿いが白沢宿、日光道中が徳次郎宿となります。徳次郎宿は上徳次郎宿、中徳次郎宿、下徳次郎宿に分かれ、三つの宿と数えられる場合と、一つの宿として数えられる場合があります。



↑ 2 日光道中・奥州道中沿いの宿場

3 街道沿いの一里塚

一里塚は、旅行者の日印として主要な街道沿いに1里(約4km)ごとに設置された塚です。道路の両脇に2基1対で造られました。宇都宮市内にも日光街道沿いに高谷林一里塚が残っています。

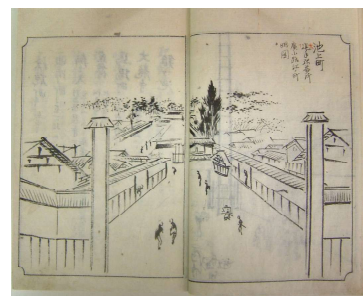


↑ 3 一里塚

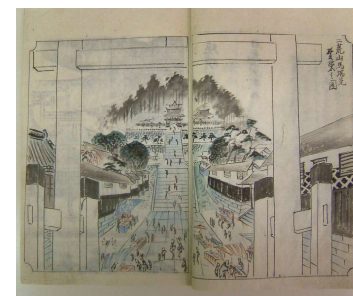
4 まちの様子が描かれた宇陽略記



↑ 4 日光道中の松並木



↑ 5 池上町から大手門にいたる木戸



↑ 6 鳥居の奥の二荒山神社

## 江戸時代の宇都宮の街並み



↑ ① 宇都宮御城内外絵図

### 宇都宮御城内外絵図

幕末の宇都宮城と城下の様子を描いたと推定される絵図です。

宇都宮城は本丸を中心に二の丸・三の丸があり、さらにその外側には家「団」の屋敷を取り囲む外堀が巡っています。正門に当たる大手門は奥州道中がおる北側に位置します。

本丸には5つの櫓と2つの門があり、内部にはある



時期まで将軍が日光社参する際の御成御殿が建てられていました。そのため、城主の住居と藩の政務を行う建物は二の丸にありました。

城の西側から北側にかけて日光道中と奥州道中が通っていました。赤く塗られた部分は寺院の敷地です。特に二荒山神社の周辺には多くの寺院が集まっています。灰色に塗られた部分は町屋部分で、日光道中・奥州道中沿いに家屋が立ち並ぶ様子がうかがえます。

### 本多正純と釣り天井伝説

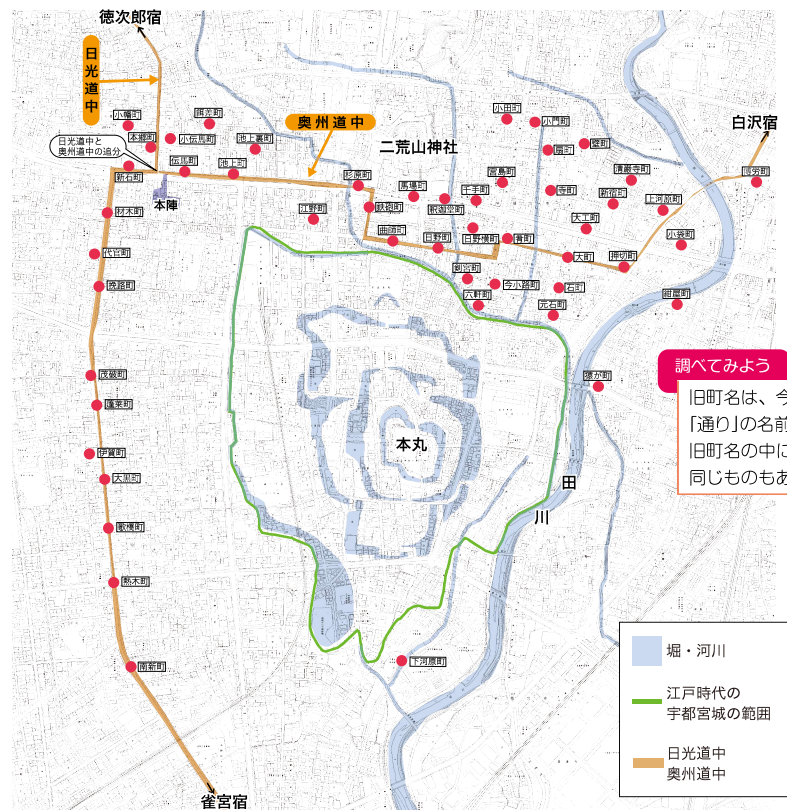
本多正純は徳川家康の側近として手腕を振るった人物で、1619(元和5)年に宇都宮城主となりますが、1622年に突然改易されてしまいます。この出来事に対し、將軍暗殺計画があったのではないかなど様々な憶測が流れ、その後「宇都宮釣天井事件」という伝説が生まれ、講談や歌舞伎などで取り上げられるようになりました。



動画を  
見てみよう！  
「宇都宮の歴史と文化」書籍「うつのみやの民話」中でも紹介されています。

← ② 『宇都宮騒動記』 (栃木県立図書館蔵)

## 江戸時代の旧町名



調べてみよう  
旧町名は、今も「バス停」や「通り」の名前で残っているね！  
旧町名の中には、今の町名と同じものもあるよ。



↑ ③ 江戸時代の宇都宮城と旧町名

### 旧町名から江戸時代の町並みを想像してみよう！

地名の由来を探してみると、その土地の歴史を知る手がかりとなります。江戸時代の町名をみると、その場所がどんな役割の場所であったか、あるいはどんな人たちが住んでいたかがわかります。右の事例を参考に江戸時代の宇都宮城下の町並みを想像してみましょう。

また、町中には、旧町名を表す表示板が立っています。探してみましょう。

【参考文献】『宇都宮の軌跡』



- **伝馬町**  
江戸時代に幕府が主要道中の宿駅ごとに荷物を運ぶ人馬(伝馬)を常備させた。宇都宮では日光道中と奥州道中の分岐点に置かれ、問屋や本陣、旅籠が軒を並べていた。
- **白野町**  
蒲生秀行が宇都宮城主になった時に、蒲生氏の出身地である近江国日野の商人を住ませたことに由来。
- **曲師町**  
江戸時代の初め頃に、檜や杉の薄い板を曲げて容器などを作る職人である曲師が移住してきたことに由来。

← ④ 旧町名を表す表示板

## 商業が栄えるまち 宇都宮

宇都宮の城下には、様々な職種の商人や職人が居住し、活動をしていました。伝馬町に旅籠が多いように、町によっては業種に偏りが見られます。城下図と併せて江戸時代の宇都宮城下がどのようなまちであったか考えてみましょう。

### ■宇都宮町内別の主な商人・職人数 (寛政期)

	古着	荒物屋	小間物屋	酒造屋	穀問屋	油屋	業種屋	肴屋	八百屋	旅籠屋	足袋屋	大工	材木屋	桶屋
宮島町	12	3	1	3				1				2		
寺町	15													
日野町		1	2				2					1		
大町		1					1	11	3		1	3		
上河原町		18	1	5		1					1	1	1	
押切町		4	1									1	1	
石町		1		1	21	1								
池上町	2	1	1	2						16		2		1
伝馬町			4	3			1	4	1	15	1		1	
小伝馬町						1						2		
杉原町	3											1		1
鉄砲町														

※1 小間物問屋…日用品などこまごました物 ※2 肴屋…魚屋 ※3 旅籠屋…旅人を宿泊させることを生業とした家

## 山陵修補と蒲生君平

### 1 江戸時代の三奇人の一人 — 蒲生君平

江戸時代後期の儒学者で、1768(明和5)年に新石町の油商福田家に生まれました。祖先が蒲生氏郷であるとの家伝から、17歳のときに蒲生姓を名乗るようになります。

著書には、歴代天皇陵が荒廃していることを嘆き、それらを調査してまとめた『山陵志』や朝廷の官職についてまとめた『職官志』などがあります。

高山彦九郎、林子平とともに「寛政の三奇人」と言われています。



1 蒲生君平像 (蒲生神社蔵)

### 2 宇都宮藩と山陵修補

戸田家の重臣であった梶六石は、幕府の宇都宮藩に対する不信任感を払しょくするために、蒲生君平が『山陵志』を著していることもあり、家老の間瀬忠至に山陵修補を提案します。そして、この案が採用され、宇都宮藩による山陵修補事業が始まります。

間瀬は、幕府から山陵修補事業の許可が出ると、その準備のため六石を京都に向かわせる一方、自身は、江戸日本橋の豪商川村伝左衛門(→p.43)を訪問し、山陵修補のための資金調達を行います。

その後、1865(慶応元)年12月までの三年間で、百を超える天皇陵の修補が行われました。

ことば  
◆山陵修補  
天皇や皇后などの墓を補修すること。



1 成務天皇陵図

## 藩を支えた農村の暮らし

村に住む農民が多くを占める江戸時代は、農民の負担した年貢が藩の経済を支えていました。宇都宮藩も同様で、ここでは、当時の農村の暮らしについて見ていきましょう。

### 1 年貢負担の軽減を求めた百姓一揆

— 杵搦騒動(18世紀中頃)

宇都宮城主の松平氏が、杵から玄米に仕上げる割合を変えることにより増税をしたことに対し、農民が結集して年貢負担の軽減を求めた百姓一揆です。この騒動は藩により鎮圧され、その責任者である鈴木源之丞をはじめとする数名が処刑されました。

このころの農村を取り巻く環境は、肥料の値段の高騰や天候不順による凶作など厳しいものがありました。



1 鈴木源之丞の供養塔 (御由良島町)

### 2 財政難を打開するための新田開発

幕末になると宇都宮藩は慢性的な財政難を打開するために新田開発に取り組みました。梶六石は宇都宮の豪商佐野屋の菊池教中の協力を仰ぎ、鬼怒川沿岸の荒廃地を開墾し、大規模な新田を開発しました。



← 菊池教中 (栃木県立博物館蔵)

## 先人の知恵と工夫 地元の大谷石を使った建物の登場

江戸時代になると、地元で産出する大谷石を建物の建材として使うようになります。特に蔵の壁に大谷石を貼る石蔵が造られるようになります。大谷石は加工しやすく耐火性に優れていることから、大切なものを収納する蔵に使うようになったと考えられます。

今でも、宇都宮市内には江戸時代に建てられた大谷石蔵が残っています。



大谷石の蔵には、壁に貼る「張り石」と石材を積む「積み石」があります。詳しくはp.75を見てみよう。



1 小野口家住宅